
正義の学園

枕源氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の学園

【Nコード】

N8922C

【作者名】

枕源氏

【あらすじ】

無期限更新停止します。ご愛読ありがとうございました。

プロローグ

世界は混沌に満ち始めた。
突如現れる巨大怪獣。

続出する宇宙からの襲来。
行動を開始した秘密結社。

開花する才能、それを悪用する者たち。
超科学、オーバーテクノロジーを駆使し、世界制服を狙う組織。
おさまらない心霊現象。

例を挙げればキリがない程、世界は混乱の渦に巻き込まれた。
後に、これらは「大異変」と呼ばれるようになる。

当初人々は、それら同時多発的侵略行為を受け入れるしか術がなかった。

しかし……。

二千十八年某月某日。

世界各地の秘密結社のアジトが、次々と壊滅させられた。
国家警察や秘密警察、そして軍でさえ太刀打ち出来なかった強大な組織。

それを、わずか三人編成の十八チームが二十の組織、およそ五百人の構成員たちを一人残らず捕縛したのだ。

その他にも、巨大怪獣の掃討、宇宙人撃退など、今まででは考えられない事態が多発した。

それら全てを行ったのが、学園の生徒たちだったのだ。
世界に十八の分校を持つ、超巨大学園。通称、WPS。

物語は、W P Sの総本山、東京の白山学園しろやまがくえんから始まる。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 1

長い黒髪を揺らしながら、日向葵^{ひゅうがあおい}は廊下を歩いていく。
心なしか歩調は早い。

しばらく歩き、扉の前で立ち止まる。

プレートには保健室の文字。

髪止め用の白いりぼんがずれてないかを確認し、スカートの裾を
正す。

そして、精一杯の笑顔を浮かべ、扉を開く。

「失礼します」

中を見渡すが、誰もいない。

「葵」

名前を呼ばれ、葵は走り出したい気持ちを抑えながらベッドへ向か
う。

「久しぶり、お兄ちゃん」

「ああ」

ベッドには、葵に似た色白の青年がいた。
^{ひゅうがたつみ}
日向龍巳。葵の兄だ。

「先生は？」

「さあ。俺も、今日が覚めたからな」

「そっなんだ。…具合、どう？」

心配そうな表情をする葵。

だが龍巳は優しく微笑み、

「大丈夫。もう平気だ」

と、葵の頭をやりわりとなでる。

「……うん」

葵も微笑み、照れくさそうに下を向いた。

「生徒会、選ばれたんだって？」

葵はびっくりして顔をあげる。

龍巳は穏やかな表情だ。

「ど、どうして知ってるの？」

葵はひどく慌てている。

「おせっかいな奴がいてな。教えてくれた」

それを聞くと、葵は肩を落としてうつ向いてしまった。

「あの、ごめんなさい……。私……」

「葵」

葵の言葉をさえぎるように龍巳が名前を呼ぶ。

葵がゆっくりと顔をあげると、そこにはいつもと変わらない、微笑みを浮かべた兄がいた。

「噂なんか気にするな。葵は、葵が出来ることを一生懸命やればいいんだ。それ以上が出来るなら挑戦すればいいし、出来ないならあきらめればいい。周りが何て言おうが、葵が頑張ったならそれでいいんだよ」

そう言っで、もう一度葵の頭を優しくなでる。

「うん……」

葵は恥ずかしそうに、しかし嬉しそうにうなずいた。

その時、葵が腕に付けている機械から小さなアラームが鳴った。

「あ！ もうこんな時間だ！」

「生徒会か？」

「うん。最初の集まりがあるの。じゃあ、私もう行くね」

慌ただしく葵は走り出す。

「気を付けてな」

「うん！ ありがとう、お兄ちゃん」

保健室の扉を開き、葵は廊下を駆けていった。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 2

「どうしよう…。間に合うかな」

ルーフの時刻表示を見ながら、葵は駆け足で廊下を走っていく。

ルーフとは、W P Sの関係者全員が腕につける、文字通りの『証明（proof）』である。多種多様な機能を搭載し、これひとつでスーパーコンピュータ数台の情報を網羅できる。このルーフは情報端末としてはどれも同じ性能だが、各科によってその装備が大きく違っている。

さらに、このルーフは『E A R T H C H I L D』、通称E Cと呼ばれる量子コンピュータにつながっており、厳重な認証機能により本人以外の使用は原則として不可能だ。ハッキング等による情報への干渉も並の技術ではアクセスすらできない。

十字の廊下を右に曲がりしばらくいくと、雰囲気の違い白い自動扉が見えてきた。

白山学園の中でも、一部の生徒にしか入ることの許されない、第九ブロックへと通じる扉である。

葵はその扉の前で立ち止まる。

ここから先は、本当に選ばれた存在の者でしか立ち入ることが出来ない場所だ。自然と、体に緊張が走る。

その時、横を何か白いものが通った。

見ると、髪の白い、葵と同じ年頃の少女が慣れた様子で扉横のパネルを操作していた。

二秒とかからず扉は開き、少女は悠然と歩いていく。

すると、なぜか扉を通ったすぐのところ、葵の方を振り向いた。

少女は、驚くほど綺麗だった。肌は髪の毛よりもまだ白く、透き通っている。大きな黒目は愛らしく、しかし同時に強い意志を感じさせる。長い髪はよく手入れされていて、清流を思わせる。小さな少女は、可愛いとは言えない。ただ、美しい。

「来ないの？」

少女の声に我に帰った葵は、少女にみとれていた自分に気づき、慌てて扉をくぐった。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 3

無機質な廊下を葵と白髪の少女は歩いて行く。第九ブロックは一般生徒はもちろん、教師ですら立ち入りを禁止しているため、人の気配は皆無だ。

気まずい雰囲気にならず、葵は少女に話しかけた。

「えと、もしかしてあなたも生徒会の人？」

「いいえ」

少女は葵の方を見ることもなく、返事を返す。

「じゃあどうしてこのブロックに？」

この第九ブロックには生徒会関係者が極一部の特別な関係者しか入室できないようになっている。少女が生徒会の関係者でないのなら――。

「わたしは特務科に所属してるから」

「と、特務科？」

葵は思わず立ち止まってしまった。

総合特務科、通称特務科。あらゆる意味で特別な存在の生徒だけが所属する科だ。そこに所属しているということはすなわち、少女はこの学園における最高幹部の一人ということである。

少女が扉の前で立ち止まり、タッチパネルを操作する。

その横顔は幼いながらも、どこか運命を達観したような強さがかがえる。

「これから辛いこともあるかもしれないけど」

やがて扉が開く。少女は絶句して立ち止まったままの葵へ視線だけを向ける。

「あなたには期待している。がんばって、葵さん」

そう言っ て扉の向こうへと消えた。

期待している。

落ちこぼれの烙印を押された葵に向けられた言葉。それは何を意味しているのか。

今の葵には、まだその本当の意味はわからなかった。

再びルーフからアラーム音が鳴り響く。

「……完全に遅刻しちゃった」

はぁー、と一つ溜息をつき、葵は走り出した。

これから葵のすべてを変えることになる生徒会室へと向かって。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 4

何とか生徒会室にたどり着き、葵は胸をなでおろした。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

気持ちを落ち着かせながら、パネルを操作する。押し間違えないよう一つ一つ確認しながら。

小さな警告音の後、扉が開く。

「し、失礼します」

生徒会室には四人の生徒がいた。

部屋はそれなりの広さがあるものの、本棚とコンピュータ関連の機械により、ひどく狭く感じる。

全部で五つの机があり、それぞれ生徒会長・副会長・会計・書記・予備と振り分けられている。

そのどれにも座っていない生徒が葵に話しかける。

「えーと、日向葵さんだね？」

「は、はい」

「よかった。道に迷ったんじゃないかと心配してたんだよ」

高等部の襟章をつけた少年はにこやかに笑った。少年は葵とあまり変わらない身長で、どこか柔和な印象を受ける。

「あれ、もしかして生徒会長さんですか？」

「うん、今日は初日だからね。オリエンテーションを任されたんだ」

生徒会長、三橋涼^{みつはしりょう}。高等部三年でありながら、その小さな体と爽やかな笑顔でいつも中等部に間違われてしまうという童顔の持ち主

だ。

「それじゃあ説明を始めるから、日向さん、座ってください」
「あ、はい」

葵は部屋を見渡す。

席にはそれぞれ三角錐が置かれており、役職が書かれている。

生徒会長と書かれた三角錐の席に座っているのは厳しい目つきをした少年で、少し小さめの眼鏡をかけている。

書記には先が二股にわかれた帽子をかぶっている、幼い女の子。会計には見るからにスタイルのよさそうな優しげな眼をした少女が座っている。

葵は、残る「副会長」と書かれた三角錐の置かれた席へと向かっていくのだった。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 5

少年は柔和な笑みを浮かべながら説明を始めた。

「今日はみなさんへ生徒会のおおまかな説明をさせてもらいます。ある程度はマニュアルを見れば大丈夫だとは思いますが、色々と複雑な部分もあったりしますので遠慮なく質問してください。さあ、ではルーフコードN-3350を起動してください」

葵たちはルーフにコードを入力する。すると、ルーフに生徒会について詳細に書かれたマニュアルが表示された。涼の指示に従いながら、そのマニュアルを読み進めていく。

生徒会の主な役目は各科同士の情報を円滑に伝達、仲介することだ。

戦闘に関する情報は情報特務科の担当だが、それ以外、例えば武器のグレードアップの要請であったり、資金面の優遇の要請など、より雑務的なことを任される。もちろんイベントの進行や調整なども生徒会が担当している。

生徒会そのものの仕事量は相当なものだが、その量に対して割り当てられる人数は少ない。会長、副会長、会計、書記のたった三人だ。そのため生徒会に属するものは各科の出席を免除されている。だが、その制度があるにもかかわらず生徒会の人気はあまり高い。

いや、その制度があるからこそ人気がないとも言える。

生徒会は希望してなれるものではなく、学校側からの指名によって選ばれる。その選考基準は不明だが、生徒たちの間ではある噂が

存在する。

科への出席を免除されるということ。それは科にとってのお荷物だからということではないのか？ そう、生徒会の役員に選ばれるということとはつまり――。

「落ちこぼれ」

葵たちは一斉に視線を涼へと向けた。

「生徒会に選ばれるものはその烙印を押された者たち。……生徒たちの間ではそういう噂が流れているみたいだね」

自虐的な微笑みを涼は浮かべている。

「確かに僕は科の中ではいい成績を残していたとはいえないから、反論のしようはないかな。けれど、これだけは言っておく」

それまでとは違う厳しく、だが真つすぐな瞳で葵たちを見据える。

「君たちは『選ばれた』んだ。今はその意味はわからないかもしれない。でも、そのことだけは忘れないでほしい」

そう言って、涼はもう一度やさしく微笑んだ。

生徒会のお仕事 a c t 1 - 6

「——とまあ、大まかな説明はこんなところかな」

一時間弱の生徒会の説明を聞き終え、葵は軽く息を吐く。
時刻はすでに午後五時をまわっている。

「今日はこの辺にしておこうか。本格的な説明は明日からということにしよう」

涼はルーフを閉じ、メンバーを見渡す。

「そういえば、まだメンバー同士の自己紹介がまだだったね。明日から生徒会として一緒にやっていくわけだから、自己紹介ぐらいしておかないとね。じゃあまずは……」

「はい、はい！」

「ん、じゃあ小宮さんからお願いしようかな」

「はい！」

元気に手をあげたのは、先が二股に分かれた帽子をかぶった小さな女の子だ。

「小宮すぐる（こみやすぐる）、魔法研究科初等部四年生の九歳です！好きな食べ物はショートケーキで、嫌いなのは唐辛子。趣味はお散歩で、特技は魔法陣を書くことです！書記を任されてドキドキだけど、精一杯頑張ります！よろしくです！」

ぺこり、と可愛くお辞儀をしてすぐるは自己紹介を終える。

「うん、実に自己紹介らしい自己紹介だ。じゃあ次は隣の大河原さん、いつてみようか」

「はい」

すぐ隣の隣に座っていた少女がゆつくりと立ち上がる。すらりとした高身長に、抜群のスタイル。かなりの美少女だ。

おおがわらみさき

「大河原美咲といいます。ACL（地球外生命体対応科）の高等部三年生です。好きな物は和菓子全般です。嫌いなものは……特になにかしら。趣味特技は音楽関連ですね。私で会計が務まるか不安だけど、どうかよろしくお願いしますね」

聖女のような笑みを浮かべ、美咲は自己紹介を終えた。

「大河原さんはこの中では一番の年長者みたいだから、色々お願いしますね」

「はい」

「さて、次は日向さんかな」

「は、はい」

「日向葵、OGC（オーバーテクノロジー研究学科）の中等部四年生です。好きな食べ物は果物とかで、嫌いなのはねばねばした物です。えーと、趣味は読書で、特技は……うー、特にないです……。副会長っていう、なんだか大変そうな役職だけど、頑張っていると思います。よろしくお願いします」

人見知りの葵にとっては自己紹介も辛いものだったが、なんとか終えることができた。残るは生徒会長だけだ。

（どんな人なんだろう。怖い人じゃないといいな……）

涼に促され、残る生徒会長が立ち上がる。

「芝原宗司。しげはらむつじ S C T（特殊戦闘員養成科）高等部一年。好き嫌い特になし、趣味特技特になしだ」

小さな眼鏡をかけた少年はそれだけ言っただけで席に座る。緊張の解けかけた空気が、一変して重くなる。

（怖い人……なのかな）

宗司と名乗った生徒会長は腕を組みじっと黙している。

（私、この人とやっていけるのかな）

生徒会は三年間の活動を行う。つまり、三年間はこのメンバーでやっていかなければならない。それがどんなに相性の悪い間柄であってもだ。

「うーん、なるほど」

涼が口を開いた。

「どうやら芝原君はツンデレのようだね」
「誰がツンデレだ！ 誰が！」

宗司が鋭い突っ込みを放つ。
一瞬、さつきとは違う意味で場が静まる。

「……あ」

宗司は周りの視線に気づき、再び席に着く。

「とにかく、俺はツンデレとかじゃない」

「わー！　これが本物のツンデレなんだねっ！」

「私初めて見ました。感動です！」

「だから違うと言ってるだろーがっ！」

すぐると美咲がからかい、宗司はそれにも突っ込む。

涼の言うように、ツンデレであり、あるいはいじられキャラなのかもしれない。

三人の愉快なやり取りに、葵は思わずクスリと笑みをこぼす。

（この人となら、やっていけるかもしれない）

これからの生徒会。

なんだか楽しくなりそうな予感がする葵だった。

妖霊万来 「黒蛇」その一

「では、これからもよろしく願いします」

「ええ、期待していますよ」

きれいな黒髪に大きな白いリボンをした少女が一礼し、隣にいた小さな眼鏡をかけた少年と共に部屋を後にした。

「あの二人が今度の生徒会長と副会長さん見たいですねー」

のんびりとした口調で巫女服姿の少女が口を開く。

「……みたいだな」

やる気のない声でぼさぼさ髪の少年がつぶやく。

「んー、二人とも成績が悪そうには見えませんけどねー」

「成績云々はともかく、リボンの子は美人だな。ぜひともお近づきになりたいところだ」

「微妙に話がかみ合ってませんよー」

「グダグダ夫婦漫才を邪魔して悪いが、お前ら何でここにいるんだ？」

生徒会の二人と話をしていた妖霊対策科委員長、あらかわけんじ荒川賢治が二人に話しかける。

既に授業は終わっており、後は各自が訓練や学習を行うだけで教室に残っている必要はないのだ。委員長である賢治だけが生徒会の対応をするため残っているはずだった。

「そんな冷たいこと言わないで下さいよー。どんな人が新しい生徒会を任されたのか気になってたんですよー」

「男一人女三人のハーレムっていうから気になってたんだよ」

「……まあどっちも暇人だってことだな」

わざわざ突っ込むのも煩わしいので、賢治は机から書類を一束取り出した。

「ちょうど二人に渡すよう言われてたやつだ。明日渡すつもりだったが、今日のうちに済ませておくといい」

「すまん、急用を思いだし」

「だめですよー。今日やれることは今日やらないと」

巫女服姿の少女が逃げ出そうとした少年の襟首をつかむ。

「いや、おれは急用がだな」

「それじゃあ行ってきますねー」

少女は書類を受け取ると、そのまま少年を引きずりながら教室を出て行った。

二人が去り、賢治はため息をつく。

「認めたくないが、あんなのがうちのエースなんだよな……」

妖霊万来 「黒蛇」その二

「なあー。別に明日でいいんじゃないのかー」

やる気なさそうにぼさぼさ髪の少年が嘆く。

「だめですよー。今日やつとかないとー、私とゆうちゃんのスケジュールが合わなくなっちゃうんですよー」

巫女服姿の少女が手元の資料を見ながら言う。

ゆうちゃんと呼ばれた少年は首を傾げる。

「俺、なんか予定あつたかな？」

「フリーのゆうちゃんと違ってー、紫光院家のるりはいそがしいんですー」

紫光院家。はるか昔から続く巫女の家系だ。十五年前の大異変からその力は確かなものとなり、妖霊対策の第一線として絶大な信頼を得ている。

巫女服姿の少女の名は紫光院瑠璃しゅいつきんるり。肩で切りそろえられた髪に、いつもふわふわとした笑顔を浮かべている少女だ。いつも穏やかで、ゆったりとしたしゃべりをする。

瑠璃は紫光院家の長女であり、学園の任務と紫光院家の任務を同時に請け負っているのだ。

「はあー。今日はだらだらする日だったのによー」

「ゆうちゃんは毎日だらだらじゃないですかー。えーと、依頼主はー……あ、やいこちゃんだったんだ」

「知り合いなのか？」

「分家の子ですー。かなりの霊力を持っててー、とってもかわいい子なんですよー」

「ふむ。では早速そのやいこちゃんの所に行こうじゃないか」

ぼさぼさ髪の少年はがぜんやる気に満ち溢れる。

「げんきですねー、ゆうちゃんはー」

「はん。ニヒルな霊能力者こと、神風幽介様は美人の味方なのさ」

「あははー。ニヒルだってー。あははー」

「うるせー。勝手に笑ってろ」

巫女服姿の少女とぼさぼさ髪の少年は依頼を受けに学園を後にする。

かなぎゆうすけ

神風幽介。ぼさぼさ髪にやる気のない眼。顔立ちは整っているのに、そのやる気のないでたちで台無しにしてしまっている。

有名な神社の子でも、高名な霊能力者の家の子でもない。ごく普通の家系の少年だ。だが、妖霊対策を生業にする者達に、彼の名と、その二つ名を知らないものはいない。

彼はその世界ではこう呼ばれている。

神風幽介——無限の霊力を持つ男、と。

妖霊万来 「黒蛇」その三

「へえ。いい所に建ってるな」

「この辺では一番濃度が高いところですからねー」

学園から電車で一時間。ちいさな山に建てられた峯山神社の入り口に二人はいる。

「そんじゃ、日暮れ前に済ませちまうか」

「済むといいんですけどねー」

「ん？もしかしてめんどい任務なのか？」

「さあー。どうでしょうねー」

曖昧な返事をし、るりはとことと神社へと続く階段を登っていく。

幽介は怪訝に思いながらもるりの後へと続く。

階段を登り終えると、巫女服姿の少女が掃き掃除をしていた。

「あの子か」

「うん。やいこちゃんだね」

二人に気づき、やいこは掃除の手を止め首を傾げる。そしてるりの姿に気づくと、慌てて近づいて来た。

「瑠璃様！ どうしてこちらに？ 予定では明日のはずでは……」

「そうなんだけどねー。どうせ暇だったし今日中に済ませようかなーって。今日じゃ都合悪かったかな？」

「いえ、大丈夫ですよ。一日でも早い方がいいですし。……あの、

「こちらの方は？」

やいこは自分を凝視し続けている幽介に視線を向ける。

「私のパートナーの神凧幽介。わたしはゆうちゃんって呼んでるよー」

「そうでしたか。私は峰富士やいこ、この神社の巫女をやっています」

丁寧にお辞儀をするやいこ。しかし、幽介は何の反応も示さない。

「？ あのこと……？」

やいこがさらに話しかけようとしたとき、

「なるほど」

ふいに幽介が口を開いた。

「上から82、60、83。Cカップ。趣味は茶道、特技舞踊。現在彼氏なし。が、密かに思いを秘めた男性が——ぐぶうお！」

淡々と何やら語り出した幽介をるりがぶん殴る。

「だめじゃないですかー。何人を勝手に霊視しちゃってるんですかねー」

「い、いや待て。これには訳が」

「問答無用ですー」

幽介の顔をぐりぐりと笑顔で踏みつけるるり。自分が霊視されて

いたとわかり、やいこは顔を真っ赤にしてその光景をただ見ているだけであつた。

妖霊万来 「黒蛇」その四

なんとかるりをなだめ、三人は社務所へと入る。

「さて、それじゃあ詳しい話を聞こうか」

「今さらまじめぶっても遅いですよー」

「ごほん。何をおっしゃる。わたしは常にまじめだよ」

「どの口がそんなこと言うですかねー」

二人の言い合いに苦笑しつつ、やいこはお茶を差し出す。

「どうぞ」

「ん、ありがとう」

「どうもですー。……それで、わたしたちへの依頼はどんな内容なんでしょうかー？」

「はい。もしかしたら、あまり大したことではないのかもしれないかもしれませんが……」

やいこはうつ向き気味に語り始めた。

「ここ最近、この神社周辺の霊的磁場が異常に強くなってきてるんです」

「むー。そう言われればここはちょっと息苦しいかも」

「ええ。敏感な人なら寒気を、瑠璃様ほどの霊力を持つ人ならば息苦しさを感ずるほどに。」

大異変以来、霊が及ぼす影響はより顕著なものになっている。その一つが霊的磁場の増大だ。

霊的磁場とは、幽霊や妖怪、すなわちこの世ならざるものがある

場所で発生するもので、周囲の人や動物に悪影響を与えるものだ。

「それで、どうして急に霊的磁場が強くなったのか、その原因を調べて、出来るならその原因を取り除いてほしいんです」

「なるほど、わかりました。では早速参りましょうか」

「あれ、ゆうくんもう原因わかつちやったんですかー?」

やいこが語り終わるやいなや幽介は立ち上がり、出入口口へと向かう。

「ああ。まあ見ていてください、やいこさん。僕がすぐに片をつけてあげます」

幽介は自信たっぷりにそう告げた。

妖霊万来 「黒蛇」その五

幽介が先導し、三人は神社の裏の小さな森へと入った。

少し開けた場所で幽介は立ち止まる。

「うん、この辺りでいいだろう」

「んー、確かにここ一帯は霊的磁場が強いみたいだけど。何をする気ですかー？」

「ふふふ、決まっているだろう。原因を呼び出すのだよ」

「あー、いつも通り手っ取り早く、ですかー。……ところで、いつまでそのキャラを引きずる気ですかー？」

「ん、だな。さすがに引きずり過ぎか」

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

二人は何くわぬ顔をしているが、やいこには訳がわからなかった。

「原因を呼び出すって……その原因の正体がわかったのですか？」

「いや、全然」

幽介はあつさりと否定する。

「で、でも、呼び出すということは幽霊や、妖の類なのですよね？」

「ん、まあそうなる」

「それなら、どういった種類のものなのかきちんと霊視してから除霊した方がいいのでは……？」

通常の除霊ならば、じっくりと霊視を行いどういった除霊方が適

切かを吟味した後に始める。そうしなければ波長や霊質などを見誤り、失敗する可能性があるからだ。

「あー、普通のやつらはそうかもな。でもま、俺らには俺らのやり方があるんでな」

「そうですよー。型にとらわれてちゃいけないのです」

「しかし……」

「まあなんでもいいさ。とりあえずさっさと終わらせて、お茶の続きでもしようぜ」

投げやりに会話を終わらせ、幽介は開けた場所の中心へと歩いて行った。

妖霊万来 「黒蛇」その六

幽介は立ち止まり、やおらに目を閉じる。そしてほんの少しだけ腕を広げ、そのまま動かなくなった。

「あの、幽介さんは一体何を？」

「んー、たぶん結界を張ってるんだと思うよー。いつもそうしてるし」

結界とは、主には特定の存在の侵入を阻むためにつくられるものである。鳥居などがその一例だ。

「結界？ でも、幽介さんはただ立つてるだけに見えますけど……」

結界に効力を持たせるためには、やはり念入りの準備が必要になってくる。しかし、結界を張っているという幽介は立ち尽くしたまま動いてはいない。

「結界の張り方も人それぞれなんだよ。あ、そろそろかな」

「え？ ……！？」

立ち尽くす幽介の体から、淡い光が立ち上り始める。煙のようにゆらゆらと揺れながら、じわじわと広がっている。

「あれは……まさか、そんな……」

やいこは驚きを隠せない。

確かに人にはそれぞれオーラが見えることがある。だがそれは見

ようとしなければ見れるものではない。霊視、あるいは特殊な環境下でもなければ見ることはできない。

そのはずのものが、肉眼で見えているのだ。

それは、幽介が尋常ではない質と量の霊力を放出しているということに他ならない。

「瑠璃様、まさか幽介さんは霊力の放出をしているのですか？」

「うん、そうだねー。ゆうくんは霊媒とかの道具を使いたがらないから。自分の霊力だけで結界とかをつくっちゃうんだよ」

「そんな！ 霊力と魔力は似ているようで、全然違うものなのですよ！？ 下手をすれば命にかかわることなのに！」

一般的には霊力と魔力は同一視されがちだ。しかし、性質は似ていてもその根本はまるで違う。

魔力と霊力の元は魂であることに変わりはない。だが、魔力は魂が生み出す余剰エネルギーであるのに対し、霊力は魂を肉体に留めるためのエネルギー。それはつまり、魔力が尽きるのは極限の疲労と心労となり、霊力の枯渇は死を意味するということなのだ。

慌てるやいことは対照的に、るりは平然としている。

「あははー。これで命の危険があったら、ゆうくん百万回は死んでもかまねー」

「……もしかして、いつもこのようなことを？」

「うん」

あっさりとうなずくるりに、やいこは軽いめまいをおぼえる。そ

れほどまでに幽介の行為は無茶苦茶なのだ。

「ゆうくんは、無限の霊力を持つてるらしいから」

「無限の、霊力……」

魂をつなぎとめるエネルギーが、無限。それは一体何を意味するのだろうか。

しかしやいこはそのことよりも、その時のるりの様子が気になっていた。

普段は見せない、複雑な表情。悲しんでいるのか、怒っているのか。笑顔しか見せないはずの少女の、悲痛な顔。

なぜるりがそんな表情をしたのか、やいこにはわからなかった。

妖霊万来 「黒蛇」その七

数分後、幽介は一つ溜息をつくとり達の元へと戻った。

「とりあえずこんなもんだ。もうすぐしたら効力が出始めるはずだ」
「何の結界を張ったんですかー？」

「今張ったのは『幽結界』だ」

「へえー。じゃあちよつと手強いんだ」

「ああ。たぶんな」

「あの、幽結界とは？」

聞きなれない結界の名に、やいこは首を傾げる。

「あー、まああれだ。……るり、頼んだ」

「むー。説明ぐらいすればいいのに。えーとね、ゆうくんの張る結界はどれもゆうくんオリジナルなの」

「オリジナル……」

現在まで伝わる霊術の多くは、千年以上前から伝わる術か、それらを模したものばかりだ。新たに術を生み出そうとするには、霊力の消費が惜しく、試そうとするものも少ない。

大異変後は強い霊力を持つ者たちが多く現れ始めたため、いくつかは新しい術などが作られているが、それでも成功例や作成例は二十年たった今でも、公式上は十に満たない。

それだけ難しいことをを独力でやり遂げているのだ。

「それでね、この結界は主に周りの霊気を集めて、自分たちに取り

入れるの」

「簡易的な霊穴のようなものですか」

霊穴とは常に霊気が満ちている場所のことで、古くは恐山などがあるが、大異変以降は各地で頻繁に出現している。

「そーだね。で、幽結界はそれだけじゃなくて、さらに特定の場所からはもっと霊気を集められるの」

「じゃあ、一部分は強い霊気を、そことは違う一部分は霊気を弱くできるのですか」

「そーいうことだねー」

「こんな短時間でそんなすごい結界を張れるなんて……」

「ふふふ。この俺の凄さを再確認してくれたようだね」

「ちょーしに乗ってるとまた踏みつきますよー？……それより、そんなに強い霊がいるなら見えてるとおもっただけどー？」

るりややいこは辺りを見回すが、そういった霊の姿や気配は感じられない。

「ああ、そいつは逆だ」

「逆？」

「強すぎるから見えないんだ」

「強すぎるって……どういうことですか？」

「あー、だからほらあれだ。神様はたとえ現世に降りても見れないっつていうだろ？」

「神様は格式が高いから、見せようとしなければ見ることも触ることもできないってやつかー。ってまさか……」

るりとやいこは恐る恐る幽介が立っていた場所を見る。

「か、神様が降りてらしてるのですか？」

「……さあな。少なくとも、格はそこらのやつらとは全然違う」

「あー、だから幽結界なのかー。こっちの靈力をあげて、無理やり
格式をあげてるんだね」

「そーいうことだ。ん、そろそろか」

幽介の言葉に、るりとやいこは息をのむ。

少しずつ空気が変わってきている。鳥のさえずりも虫の声もなくなり、ただ木々のそよぎだけが辺りを包む。

そして、それはゆっくりと姿を現し始めた。

何もなかったはずの場所に、何か巨大なものが、少しずつその輪郭をあらわにしていく。

「うわー……」

「……でかいな」

「これは……」

うごめく巨体。二つに分かれた舌先。それは、巨大な蛇であった。

妖霊万来 「黒蛇」その八

そこに鎮座していたのは、巨大な蛇だった。

全身が墨で塗られたように黒く、目がどこにあるのかすらわからない。ただ、時折出し入れする先の分かれた舌によって、おおまかな口の場所だけがかろうじてわかる。

蛇のとぐろを巻いた全長は三十メートルをゆうに越している。

「……るり」

「……なんですかー？」

「今度からちゃんと霊視をしようと思う」

「いい心がけですー。対策と傾向を知るのは大切ですからねー」

「のんきなこと言ってる場合じゃないですよっ！」

やいこが叫ぶと同時に、黒の大蛇が大口を開けて幽介たちに迫りくる。

「くそっ！ とりあえず太郎、頼む！」

幽介はポケットから犬の形をした紙を取り出し、蛇へとかざした。

紙がびしり、と硬直し、そこから霊気があふれ出し少しずつ犬の形を成していく。

蛇がその犬へと近づく。が、犬の前で壁に当たっているかのように前へ進むことができないでいる。

「あれは、式神!？」

「うん、そうだねー」

式神とは、形代と呼ばれる紙に霊を宿し、自分の分身として使役するものだ。

「でも太郎とは？」

「交通事故で死んだ野良犬だからねー。ほんとには名前はないんだよー。」

「の、野良犬……」

確かに式神は高等な霊だけでなく、動物霊などの下級の霊を使役することがあるが、それでもその辺の野良犬を使役することはない。えない。

「毎日ゆうくんの霊力をえさにしてるからねー。へたな式神よりよっぽど強いよ」

「あはは……」

自分の常識が一切通用しないことに、やいこは力なく笑うしかなかった。

（でも、なんだろう……。この光景、どこかで）

やいこは巨大な蛇が眼前に迫っているというのに、なぜか恐怖を感じていなかった。

むしろ、なつかしい、という気持ちが胸に湧き上がっていた。

「やいこちゃん？ どうしたんですかー？」

どこか遠い眼をしていたやいこに、不思議そうな表情で瑠璃が訊ねる。

「え？ あ、いえ、なんでも……」
「？」

バチツ、と鋭い音が響き、やいこ瑠璃は慌てて幽介の方へと向き直る。

式神の作る高圧の霊壁によって蛇の進行を食い止めてはいるものの、徐々に式神の力が押されてきていた。霊壁を突き破られるのも時間の問題だ。

「そろそろ時間切れか……。るり！ 離れすぎないように離れてる！」

「無茶を言うんですねー」

幽介の言うように、瑠璃とやいこは十歩ほど後ろへ下がった。

それを確認した幽介はポケットからさらに二枚の形代を取り出す。

「小梅、佐助、もうちょっと時間を稼いでくれ！」

その形代も同じように犬の姿となり、霊壁をさらに厚くした。

「どこまでやれるかはわかんねーが、やるだけやるか」

幽介はけだるげに息を吐き、ポケットから鳥型の形代を放り投げた。

「行け、颯、はやて烏丸からすま！」

形代はそれぞれ燕と烏へと姿を変え、黒蛇へと向かっていく。

それを見ながら幽介は指を組み、呼吸を整える。

「行くぞ、『冥結界』！」

妖霊万来 「黒蛇」その九

式神、颯と烏丸は黒蛇へ交差しながら向かっていった。そして黒蛇の周りをぐるぐると周り、霊壁を成していく。

幽介は幽結界を張った時の何倍もの霊気を放出し、黒蛇を覆う霊壁へと注ぎ込む。

黒蛇の周囲には式神たちと幽介の霊圧により、強力な結界が出来ていた。

「んー、冥結界かー。蛇に何かが取りついて巨大化したのかなー？でもー、未完成な冥じゃ完全な分離はできないかなー」

冥結界は憑依された者から霊を強制的に引きはがす結界だが、その効力が発揮するには時間がかかる。ましてや下準備も終えずに、楓と烏丸を媒体に無理やり張っているのだ。その効果は普段の十分の一にも満たないかもしれない。

太郎、小梅、佐助の結界は強力なものだが、黒蛇との圧倒的な霊圧差により少しづつ押されている。破られるのは時間の問題だ。

『幽介、さすがにちときつい』

「耐えろ、太郎」

『ゆうにいい、小梅がんばるっ！』

「ああ、後でいっぱい遊んでやるからな」

『幽介、三歳ぐらいのメスを紹介しろ』

「佐助、お前は後で避妊手術だ」

『んなことしたらてめえの大事なところを噛みちぎる』

「やれるもんならやってみる」

式神たちと軽口を言いながらも、結界への霊力供給をし続ける。少しづつ黒蛇から何かが引きはがされてはいるが、それまで霊壁が持つかは、賭けだ。

（さすがに、歩の悪い賭けだったか）

流れる汗を拭う余裕もないほどに、幽介は焦り始めていた。

「まずいなー」

その様子を察知し、瑠璃も思案する。

「よし、ここは逃げよう。さあ、やいこちゃん」

一秒とかけずに決断した瑠璃はくるりと踵をかえす。だが、やいこは動こうとしない。

「やいこちゃん？」

瑠璃が声をかけると同時に、やいこは走り出す。黒蛇のいる方向へ。

「ゆうくん！ やいこちゃんが！」

幽介が振り返る。だが既にやいこは幽介を追い抜いていた。

『幽介！ 限界だ！』

太郎がそう叫んだ時にはもう遅かった。

黒蛇は勢いをつけ霊壁へとぶつかり、突き破る。そしてその勢いのまま、口を広げ幽介へと襲いかかる。

いや、正しくは。

幽介の前に立ち、両腕を広げているやいこへと。

妖霊万来 「黒蛇」その十

十年前。

やいこが神社の裏を掃除していると、いきなり背中にぞわり、と悪寒が走った。

「なんだろう……」

嫌な予感がしたやいこは、掃除を中断し裏の森へと入っていった。歩いて数分もしないうちに、その悪寒の元へとたどり着いた。

そこでは数人の子供たちが騒ぎながら何かに石を投げつけていた。やいこの位置からは何に石を投げているのかわからない。

「何してるの？」

やいこが声をかけると、少年が振り向き答えた。

「蛇退治だよ」

「へび？」

「ああ。そこにでっかい蛇がいるんだ。そいつを退治してるんだ」

近づいてみると、子供たちの視線の先に大きな白い蛇がいた。体長はおよそ五メートルほど。威嚇音を出しながら子供たちへ飛びつくが、見えない壁に当たっているかのように、一定以上動けないで

いる。子供たちはそれに気づいているらしく、全く動じず石を投げ続けている。

（あれは、結界？）

この結界は中からは出られないが、外からの侵入はできるタイプのようだ。蛇を覆うように薄く霊壁がつくられ動くことができないが、子供たちの投げる石は蛇を傷つけている。白い体からところどころ出血し、その赤い色が痛々しい。

そして、蛇からはどす黒いオーラが漂っている。そのオーラは結界を超え、子供たちにまで広がっている。やいこの感じた悪寒の元は、この憎しみのオーラだった。

「ねえ、やめてあげなよ。かわいそうだよ」

「うるさいな、黙ってるよ」

「そうだそうだ。こいつ、怪獣の子供かもしれないんだぞ！」

「ここで退治しないと、またぼくたちの町が壊されるかもしれないんだ！」

やいこの注意に耳を貸さず、執拗に石を投げ続ける子供たち。

大異変以降、怪獣と呼ばれる未確認巨大生物は既に十回以上襲来している。その度に町を破壊し尽し、人々に恐怖と憎しみを植え付けている。この子供たちも例外ではない。

「違うよ！ この子はそんなじゃないよ！」

もちろんそれはやいこもそうだ。しかし、やいこにはこの美しい白い蛇を憎む気にはなれなかった。今は憎しみの色しか見えないが、なんとなく、この蛇は『いい蛇』のような気がしていたのだ。

「離せよ！」

「きゃっ！」

少年は止めようと腕をつかんだやいこを無理やり振りほどく。その勢いでやいこは地面に倒れた。

蛇の黒いオーラが増大した。

「！ だめ！」

結界は蛇の度重なる体当たりにより、すでに強度が弱っていた。次の体当たりで壊れてしまうほどに。

蛇の体当たりは結界を突き破り、一直線に子供たちへと向かっていく。その尖った牙を突き刺そうと、大口を開ける。

だが、その牙は子供たちに刺さることはなかった。

蛇の牙は、飛び出してきたやいこの肩に深々と突き刺さった。

「っ！」

激痛で声を上げることもなく、その場で膝を折るやいこ。

子供たちはやいこの肩からにじみ出る血に悲鳴をあげ、そこから逃げ出して行った。

「だめ……だよ、へびさん」

痛みに泣きそうになりながら、やいこは蛇へ話しかける。

「白い蛇はね、神様に近い存在なんだよ。だから、弱い人を守らなきゃいけないの。傷つけちゃ、ダメなんだよ」

蛇から立ち上る黒いオーラは、少しづつ弱まってきた。

「さっき私が倒されたとき、怒ってくれたんだよね？ 本当は、優しいんだよね？ ……だから、お願い。もうどんなことがあっても、誰かを傷つけないで」

蛇はゆっくりと牙を抜く。もうその体から黒いオーラは見えない。すると体軀をうねらせながら、蛇は森の奥へと消えていった。

それを見送ったやいこは、痛む肩を押さえながら神社へと戻ったのだった。

そして現在――。

「……約束、守ってくれたね」

巨大な黒蛇は、やいこの眼の前でぴたりと動きを止めていた。

蛇の体から黒い何かが抜けていき、その体が少しずつ小さくなっていく。そして、全てが抜けきった黒き巨大な蛇は、小さな純白の蛇へと戻ったのだった。

妖霊万来 「黒蛇」その十一

白い蛇は幽介と瑠璃へおじぎをするようなしぐさをし、そのまま森の中へと帰って行った。

やいこはそれを見届けると、幽介と瑠璃の方へと向きなおり、やはりおじぎをした。

「ありがとうございます。この近辺の霊的磁場も、元の強さに戻ったようです」

神社を覆うように張りつめていた霊気は薄まり、いつもどおりのほんの少しだけ威厳を感じさせるような強さへと落ち着いたようだ。

「ま、おれは大したことはしてないんだけどな。それより、携帯の電話番号を……」

瑠璃が渾身の力をこめて幽介のつま先を踏む。うずくまる幽介。

「最後のそれがいつも余計です！。それより、あの蛇が原因なのはわかりましたけど、なんであんなに黒くでつかくなっただんですかー？」

「それは私も気になります。わたしが前にあの蛇を見た時は、もっと小さかったはずですよ」

まだ痛みに冷や汗をかきながらも、幽介は立ち上がる。

「あー、それはわかんねえな。なんか『黒いなにか』が取りついてたみたいだけど」

三人が首をかしげていると、式神・颯が何かをくわえて幽介の肩へとまった。

『原因はこれだと思われる』

颯はそう言うのと、くわえていたものをぽいつと投げる。

それは、黒い塊だった。毛玉のようにふわふわとしたみかけだが、その色は墨のようにまっ黒だ。

「颯、これは？」

『黒き蛇が白き蛇に戻った際、黒き妖気が一点に集まり、それになつたようだ』

「じゃあ、これがあの蛇に取りついてたんですねー」

「でも、一体なんでしょう？ 妖怪の類でしょうか？」

黒い塊はつついてみても何の反応もない。だが、わずかに霊力が感じられるので、ただの塊ではないようだ。

「とりあえず、これはゆうくんが持って帰って調べてください」

「なんでおれが」

「暇なんですよねー？」

「暇で暇で忙しいんだ」

「私は家の用事があるんですー。だからゆうくんが持って帰って報告とかしないといけないんですー」

「いやだ」

「直球で断つてもだめですー」

二人がぐだぐだと言い合っていると、式神の太郎がとことこと近

づき、その黒い塊をくわえた。

『幽介。この塊、持ち帰ろう』

「太郎まで言うか……」

『この塊、妙に気になる。なに、苦勞はしても損はしないさ。おそらくな』

「あー、わかったよ。持ってかえりゃいいんだろ」

幽介は口論をあきらめ、黒い塊を札でくるみ、懷に入れる。

「さーで、とりあえずは一件落着だ。お茶菓子を食うぐらいの時間はあるんだろ、るり？」

「そうですねー。それぐらいはありますね」

「ふふ。では、お茶にしましょう。父が隠してある、いいお菓子があ

るんですよ」

三人は和やかにその場を後にしたのだった。

ジェネシス 第一章「ジェネシス計画、始動」

「ふわー」

銀色に塗装された流線型の戦闘機を眺め、葵は感嘆の息を吐く。

「お、副会長さんにもわかります？ この機体の良さが」

「あ、はい。F系統の仕様を残しつつ、Gの特性を活かしたいデザインだと思っています」

「おお、そんなことまでわかりますか……と、確か副会長さんはオ―テクの方でしたね。私の口からだと思込に説法となつてしまひますな」

「そんなことはないですよ。私は兵器系の担当じゃなかつたから、そこまで詳しくはないですし」

隊員と楽しそうに談笑する葵にジト目を向けつつ、宗司は小さくため息をついた。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。続けてくれ」

軽く首を振り、宗司は話の続きを促す。

ここは怪獣対策科、AMD兵器監視室である。AMDとは怪獣対策科における実戦部隊の略称で、白兵戦や情報戦、戦闘機から戦車も乗りこなす特殊部隊だ。

現在葵と宗司はAMDから緊急の予算編成の提案があつたため、視察に来ているのだつた。

「まあ、正直なところ予算は十分なのですが、オーテクが次々に新兵器を送りつけてくるもので……」

「またオーテクか……」

オーテクはオーバーテクノロジー研究学科の通称である。本来はOCGと呼ばれているのだが、一般的にはオーテクで通っている。

「間に合ってる、と言っても聞かないんですよ。勝手に新兵器を送りつけては『開発料をよこせ』とせびられるし……」

18になるAMDの隊長は重々しく息を吐いた。年齢の割には苦労を重ねているようだ。

（妖霊科の委員長も似たような顔をしていたな。トップはどこも苦労しているらしい）

自分の所属している特殊戦闘員養成学科の委員長を思い出し、そのさらに上になることになる自分のこれから案じる宗司であった。

ジェネシス 第一章「ジェネシス計画、始動」(後書き)

一日遅れの更新。そしていつも以上に内容が……。それより、学校を出ようは面白いですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8922c/>

正義の学園

2010年11月3日02時34分発行